

## 私的制裁撲滅に挑んだ一兵卒

群馬県 高橋 呈介

私は大正十一（一九二二）年一月三日、現在地で出生、家族は土木業を営む父、母、学徒で横須賀海軍工廠に徴用され、肺結核を患い自宅療養中の姉、弟三人の七人家族でした。

当地の小学校を卒業して旧制中学校へ進学して柔道部に入り、三年生の時、全校唯一の二段を取得して喜んでいました。その矢先、突然父が病死しました。大学進学を夢見ていた私はもちろん、今後の家計を含め、母も大きなショックを受けました。学校からの数度にわたる慰留、特に柔道部の諸君からの在学を続ける強い要望などがありましたが、涙を吞んで中退を決意して父の仕事である土木業を継ぐことにしました。

ところが私は未成年のため後継者として登録が出来ず、これまで父の片腕として働いて下さった

屋代市三氏を代表として、群馬県土木請負業組合の役員の方々の取り計いもあって、私が成人になるまで暫定的に代表者として登録して頂きました。

私は翌日から一人夫として地下足袋姿で懸命に働きました。昭和十五（一九四〇）年三月（紀元二千六百年）、群馬県の土木経験者の中から五十人の満州建設勤労奉仕隊員に選ばれ、大陸の大地で腕を研いでこようと引き受けました。茨城県内原訓練所川田分所に入所、三カ月の訓練を受けた後、神戸港を出港、大連に上陸し、満州国吉林省盤石県煙筒山開拓団の奉仕隊として着任しました。奉仕団の方々の出身地は、群馬県八割、他県二割で満人三百人の大開拓団でした。奉仕団の任務は道路、橋梁、水路の建設が主で、私は測量を担当し、三キロほど前方の河伝県の森林地帯（裏側朝鮮）の山小屋に宿泊して、二十人ほどの満人の人夫と共に森林道路の測量に当りました。

この仕事は一カ月間で仕上げ帰団しました。ちようど開拓団の作業も一段落していましたので、

慰労を兼ねた視察旅行ということで、片言混じりの満州語を操って長春、ハルピン等を一カ月ほど

で回る旅行をしました。

任務が終わり一年振りに帰宅、間もない昭和十六年四月、群馬県土木部沼田土木出張所より土木部河川工事現場技術員の臨時職員として就職の斡旋があり、土木職員見習いに採用されました。

昭和十七年一月、姉が死亡し、母も老いて家事が大変と思い、親戚の薦めもあり現在の妻と四月に結婚しました。六月には徴兵検査で甲種合格となり、入隊までは心身を鍛えねばと、職場では重量物を持つ、担ぐ作業などを率先して引受け、人との付き合いには笑顔でをモットーに勤めました。

昭和十八年二月一日、入隊する旨の一銭五厘のハガキが届き、一月三十一日、結婚して間もない妻と別れるのが辛い中を出発しました。とくに世に言われる嫁姑並びに弟との関係は自慢出来るほど円満でしたので、必ず元気で帰るからと両手を握り合い、妻からは何にも心配せずにと逆に慰め

られました。

高崎駅前の武蔵野館に県下の入営者五十人と共に宿泊、翌朝七時三十分、両毛線高崎駅を出発しました。五分位たった頃、隣の線路の上越線と行き合った際に、私等は窓から体を乗り出し手を振って別れの挨拶を、それに応える相手の乗客でした。その時、手にショックがあり、良く見ますと右の人差指が傷ついて出血し、骨が見えているのです。骨を押し込み、手拭で包帯して辺りを眺めますと頭から出血している者、腕を押さえている者など大勢おりました。

怪我した十人ほどの入営者は宇都宮駅で途中下車させられ、憲兵に連れられ陸軍病院へ行きました。診断の結果、私は人差指脱臼と言われ、包帯の上腕を吊って、夕方会津若松東部第二十四部隊高橋隊に入営しました。

ここで四班に配属され、班長は小菅軍曹、初年兵は群馬、栃木両県出身者、二年兵、三年兵は数人程度でした。部隊の編成は五班に分かれ、各班

の人員は初年兵二十人、古年兵七人計二十七人ほどでした。私は右手を吊っているのである程度の事は出来るがほとんど見ている始末、屋外での教育も見学するだけでした。

三月四日、満州第七百二十八部隊要員として出発、駐屯地はソビエトとの国境に位置する琿春に到着しました。夕食後の古年兵からの最初の言葉は、「この部隊は元独歩第一連隊、その後歩兵第八十八連隊、さらに今の部隊に変わり、関東軍でも気合かかっている有名な部隊である、その内分かるはずだから歯を食いしばって頑張るように、そうでないとい境警備の任務は果たせないぞ」ということでした。私の手もよくなったので、入隊前に鍛えた心身を活かして、怪我治療中の遅れを取り戻し、誰にも負けないように努力することを心に誓い、当地での第一夜のベットに潜り込みました。

私の関係する上官は、初年兵教育教官の茨城県出身の菅野少尉、中隊長は千葉県出身の土屋中尉、内務班長は小菅軍曹で、また兵は全員現役で、三

今でも傷跡が堅くなっています、後で分かったことですが、上靴の不揃いは初年兵が寝静まってから、意地の悪い二年兵が蹴り飛ばしているところを見たそうです。

私は前に述べた通り軍事訓練はもとより、内務班での態度、作業等一倍努力した甲斐あって昭和十九年一月一日、兵精勤章付与、二月十日一選抜で上等兵に進級、いよいよ二年兵になり、初年兵を迎える立場になりましたが、初年兵が入って来ても決して俺達が受けたような私的制裁は絶対やらないことを誓いました。初年兵のくる日が近くなった、ある日、班長室から呼び出しがあり小菅班長より、今度来る初年兵の教育係の助手に選抜された旨の伝達がありました。「お前だったらきつと立派な教育が出来る。しっかりやれよ」との励ましの言葉を頂き、「ありがとうございます。ご期待に背かないよう頑張りますので、宜しくお願います」とお礼を申し上げ、班長室を去りました。

年兵は長野県出身、二年兵と私共初年兵は群馬、栃木県出身でした。なお下士官で曹長、准尉は、ノモハン事変での戦争経験者で、強者ばかりでした。

満州での軍隊生活に入ってから六カ月になる八月一日、一等兵に進級しました。毎日毎日が理由の分からないビンタの連続で、上官から私的制裁を強く止められていたようですが、一日として殴られない日がありませんでした。今日はビンタが無かったと喜んでベットに入って眠りに就いた頃「初年兵！ 全員起床！」と怒鳴る二年兵の声に跳ね起きると、「貴様ら弛んでいる」「上靴が揃っていない」とビンタが飛ぶ。

たまには「二列に並べ」「前列回れ右」向い同志でビンタ始めの号令、初年兵同志ですので弱くビンタすると何だその殴り方は、見本を教えてやるからよく見れと、拳握りで強烈のビンタが飛ぶ。私は見本のビンタに合い、入れ歯が欠けて下に刺さり出血し、当分の間食事の時滲みて困りました。

なぜ通信の修業受けた俺が。今までは観測の修業受けた者がなるのに、五班中俺一人が通信修業者で、他の四人は観測の修業者、しかも通信修業者での助手は私が隊始まって以来らしく、ますます今まで誓ってきたことに対する意気が燃えてきました。

二月二十日、初年兵が来ました。全員北海道旭川出身の甲種合格の体格のよい者ばかりで、二、三日は上げ膳据え膳のお客様扱いでしたが、四、五日立つと隣の班からビンタの音が聞こえてきました。でも私は誓った通りビンタなしで過ごしておると、三年兵の万年一等兵が「高橋、なぜビンタやらんか、初年兵が弛んでしまうじゃないか。上等兵になったらビンタのやりかた忘れたのか。教えてやろうか」と、この言葉に憤りを感じた、その時、ちょうど班長が入ってきたこともあって、さらに元気づけられ、「私は初年兵が入ってから三週間になり、この間彼等の行動等を用意しているが制裁するようなことは見当らない。就寝

時の上靴の整頓、襟布、靴下、敷布等の洗濯、靴下の破れの補修など完璧です。特に上靴の整頓については、私達が初年兵当時には、キチンと整頓して就寝したのに、古年兵殿が後で蹴り飛ばして整頓が悪いと理由を付けられ、ビンタを受けたことを、この目で見ておりますので、私は初年兵全員が就寝した後に見回ってからベットに入っております。

しかし、若し何かあった場合は、この体格の私だから、徹底した制裁を加えること約束します。初年兵も覚悟しておくように」と言いました。

班長のいることに気付いたのか何事もなかったように全員就寝しました。

その後二週間位たつてから夜の点呼の後、例の万年一等兵から「高橋上等兵、お前初年兵の中でトイレで煙草吸っている者がおること知ってるか」と言われたので、初年兵に問い質したが誰からも返事がないので「全員外に出ろ」と怒鳴り、兵舎から離れた所に円陣を組み、低い声で「皆は

毎日の訓練、内務班の作業で煙草吸う時間も無いことよく分かるがトイレでは良くない。忙しい中で煙草を吸う時間を見出すのも訓練の一つだ。俺は今ここで誰が吸ったのかは質さないが今後止めるように。これから兵舎の窓際に二列に並んで軍袴と袴下を膝まで下げ、自分の両手でおもいっきり自分の尻を十回叩け、その後軍袴、袴下を直して、今度は両手のひらで頬が赤くなるまで強く擦るように。では兵舎の窓際に整列するように」といいました。

そして整列が終わったところで、兵舎内に聞こえるような大声で「トイレで煙草吸った者がこの中にいるはずだが、誰からも申し出が無いので、これから全員に責任取ってもらうから股を開き歯を食いしばれ」で、先ほど命じた尻叩きバタバタ、次に頬擦り真赤な顔してして兵舎に戻りました。あたかも殴られたような赤い頬を見た古年兵は満足したのか「高橋なかなかやるね」と皮肉な褒め言葉に、私は心の内で高笑いしました。

またある時は「これから外に出て一キロの駆け足だ、外へ出る」と怒鳴り、兵舎の裏で円陣を組み二十分ほど雑談し、兵舎に入るときは荒息で、あたかも疲れた格好で古年兵を満足させたり、その外いろいろ工夫して初年兵に苦痛を与えないようにしました。そのため初年兵には感謝され、他の班の初年兵からはうらやましがられました。

私は初年兵教育の傍ら、特に日曜の外出は月一回程度でほとんど銃剣術並びに短剣術の練習に励みました。とくに朝早く兵舎の窓から見ている兵の前での短剣術の練習では、持前の柔道を活かして相手を短剣で払い、足払い、小内刈り、大外刈り等の足技で相手を倒すのが得意で、隊内でも誰にも負けない自信がありました。

さて、初年兵の一期の検閲が優秀な成績で終わり、班長からお礼のお言葉を頂き、「どうだお祝いに一杯やろう」と言われ、日曜の外出時に祝杯を挙げました。その席で私的制裁撲滅に努力したこと、古年兵のあくどい仕業等のこと、全部知つ

ていること打ち明けられ、穴に入りたい気持ちでした。これらのことが知られたためかどうか、昭和十九年九月二十日付けで大隊長より左記の賞詞が付与されました。

賞 詞 陸軍上等兵 高橋 呈介

右ノ者昭和十八年度徴収兵本業基本教育助手トシテ服務スルヤ能ク教官及助教ノ意図ニ従ヒ教育ノ準備ヲ適切ニシ又昼夜ノ別ナク初年兵ノ心情ヲ汲ミ懇切ナル援助ト且模範ヲ以テ之ヲ導キ第一期検閲ニ於テ優秀ナル成績ヲ修メタリ之平素諸上官ノ教訓ニ従ヒ粉骨碎身烈烈タル気魄ヲ以テ服務セルモノニシテ他兵ノ模範タリ仍テ茲ニ賞詞ヲ与フ

昭和十九年九月二十日

満州第七百二十八部隊菊池隊長

陸軍少佐従六位勲五等 菊 池 正 徳

初年兵教育が無事終わりホットした矢先、部隊移駐命が発令され、住み慣れた琿春を九月末出発、三江省鶴立県鶴岡に着き、同日よりソ連の国境警備に当りました。当地は満州で三番目位の大きい

炭坑町で、住民の大半が炭坑従業員でした。

昭和二十年二月一日付けで兵長に進級、またも移駐命が発令され、一月二十九日、鶴岡を出発、二月三日に釜山港到着、五日釜山港出航、同日門司港上陸、十三日門司港出航、十九日台湾基隆港上陸、二十一日台中彰化到着、同日より彰化地区の防衛に当りました。

私ども歩兵砲中隊は口庄という地名の山中に入り、竹を伐採し、これで兵舎を建て、毎日毎日が敵の上陸に備えての準備でした。部隊の編成は、中隊長藤村中尉、小隊長川村見習士官、分隊長洞野伍長、私は専任兵長です。私の分隊は私が教育したビンタ等私的制裁の苦痛を知らない者がほとんどですので、神様のように感謝されました。

日増しに食糧不足になり、栄養失調になる者も増え、それにマラリヤが発生しました。しかし病院に特效薬もないので竹の兵舎で、せいぜい頭を冷してゴロゴロ寝ているだけでした。特に重かった小隊長が亡くなられたので、中隊長の命により

だどゆっくり歩いても一時間半で着くのですが、病人を抱えての休み休みの歩行のため一日掛かりの行程でした。着いた所は遠くに人家が見える広い野原の真中で、中隊はここで起居しろとのこと。

食糧不足のなかでの細々の生活で、九月二十日、進駐軍が来るから駅まで迎えに全員出るようにとの伝達があったので元気な者だけ駅へ、汽車から降りた兵は支那人で、見て吃驚、草鞋ばきで天秤棒で鍋、釜を担ぎ、上衣は無し、麦藁帽子の兵隊で、ホテル、旅館に入りました。明日からこの連中から使役されると聞いてガツカリでした。

翌日、健康な者は空襲で破壊された道路、橋等の補修作業をしろと言われたので、適当に番割りしてこれに応えました。病人の多いなか、この作業をいつまでやらねばならないのか不安の毎日でした、疲れたせいもあってか帰国日のデマが飛びはじめました。十一月説、十二月説、それにどの部隊が帰国したとか、毎日どこからとなく情報が飛んできます。デマにだまされずに健康に気を付

皆で煙が多く出ないように火葬して、骨は同郷の初年兵にお願いしました。

暑さとマラリヤ、それに栄養失調で、動ける者が数人になったので分隊長と相談して比較的健康な人に食糧調達を依頼し、三度の食事を二度、一度とする節約の生活が続きました。

八月十五日、中隊本部に全員集合の命令があり、健在の七人を伴って出向くと敗戦の伝達でした。皆啞然として聞いていました。分隊に帰って武装解除、兵器返納の準備を終え、これから生きる事を皆で考えようと相談した結果、とにかく体力を付けるため食べられる物は何でも食べて健康になるうと、明日から早速はじめようとその日は就寝しました。翌日、川から海老、山から蜂の子、ころろぎ、野草等食べられる物はすべて食べているうちにだんだんと皆元氣付いてきました。

九月二日、中隊は鹿港に集結の命令あり、準備しておいた兵器は中隊本部に返納し、鹿港に持物は何も手ぶらで歩いて行きました。元気な身

けようと何でも食べ頑張りました。南瓜を多く食べている者は、顔が黄色になるなどの症状が出始めてきました。無理もないはず、日本人の主食である米は言うまでもなく、栄養豊富な肉等は長い間食べておりません。それでもマラリヤや栄養失調に苦しむ、でも自分の身の回りは一人で出来、また元気で内地帰還の強い希望は捨てないで、毎日笑顔の生活でした。

突然、我が部隊の復員日程は二月との確実な情報があり、全員立ち上がり、万歳で喜び合いました。しかし喜んでばかりおられません、この体調で内地までの長い船旅は大丈夫だろうかと心配でした。そこで班長と相談して物々交換で食糧の調達する案を皆に提案したところ賛成され、多くの時計が集まり、早速五人位で民家を尋ねて、雑穀、卵、家鴨、鶏、野菜等と交換して体力づくりを努めました。

やがて二月二十七日、基隆港集合の命令があり、同日同港を出航、三月一日、皆の時計のお陰で全

員元気で広島県大竹港に上陸しました。そこで身体、衣服の消毒を受けて、三月であるが夏物の上衣、ズボン、毛布二枚それに大豆粕の弁当三食分、乗車券、復員証明書等を貰いました。駅では「元気でまた会おう」の一言で、それぞれの故郷へと別れました。

私は三日夕方、上野駅に到着、当日は家へ帰る力なく、地下道で夜を明かしました。翌朝、目を覚ましますと毛布は疲れて熟睡して剥ぎ取られたことに気付かなかったのです。今考えると何があったのか考えつきませんが、また一夜、また一夜と地下道に泊り、七日午前四時に家族が就寝中に帰宅し、呼び起した家族と抱き合って喜びました。

私は低度のマラリヤに冒されておりましたので、半年ほど通院しながら静養して健康を取り戻して、父が築いた土建業に専任、現在は息子に譲り、会長として実務を離れています。そして軍隊で苦勞を共にした戦友との交際で北海道、栃木県、県内やまた戦中に苦勞した台湾へ、有志と共に旅行す

るなど親兄弟同様の付き合いをしております。

しかし最近亡くなる方が多くなり、また戦友会の参加者も、手術後の静養、足腰が弱くなり旅行出来ない等の理由で、少なくなり、淋しくなりました。

最後に戦争は永久に起してはならない、また参加してはならないことを後世に伝える義務が私達にあると思います。